

中国のほんの話 (26)
テレビドラマとその原作(2)
金庸『天龍八部』
蔭山 達弥

テレビを見ることは殆どの中国人にとって心の夕食であり、テレビドラマは中心のおかずである。どんな時でも、テレビのスイッチを入れれば、ドラマを放送している。時には10以上のチャンネルが同時に同じ「煮込み」を持って来る。数量から言えば、中国の国産のテレビドラマは毎年、1万本を超えている。ただ、全体から見れば、テレビドラマの水準は相変わらず高くなく、入念に作られた作品は少ない。その中で金庸の原作に基づいて脚色し、中国国内でロケーションを行った大型時代劇『天龍八部』は今年の旧正月期間中に放送され、大陸・台湾ともに極めて高い視聴率を獲得した。広東では常に視聴率1位を保持し、北京でも同時期に放送された他のドラマを圧倒した。

中国では時代劇のことを「古装戯」という。日本では時代劇不振が言われて久しいが、中国では毎晩いくつかのチャンネルで、豪華な宮廷、度を越した「万歳」、振り回される刀と矛、引っ張る辮髪など…、見る者に自分は21世紀初頭に生きていないのではないかという気にさせる。特に清王朝は殆ど掘り尽くされた感がする。『天龍八部』は北宋の乱世、江湖に生きる4人の若者の苛烈な運命を、壮大なスケールで描く大河ロマンであり、金庸文学の最高峰と言われる。物語の舞台となる大理国は西暦937年、雲南の西部に興り、1253年にモンゴルに滅ぼされるまでに、300年余りにわたって栄えた仏教文化の盛んな王国である。今日では大理市を中心とする地域は白族の自治州となっている。北宋の時代、武術界最大の派のリーダーである喬峰は、ある事件をきっかけに、契丹人の末裔であるという噂を流され、一夜にして名声が地に落ちてしまう。喬峰は名誉を挽回する為に、自分のルーツを探す旅にでる。この時、雲南の皇帝の息子段誉、少林寺の虚竹と出会い、三人は兄弟の契り

を結ぶ。…

金庸は「中国人のいるところ金庸の小説あり」と言われる国民的人気作家である。1924年浙江省海寧県生まれ。48年に香港へ渡る。55年より、金庸は武俠小説の創作を始める。処女作『書劍恩仇録』を発表すると、すぐ世に名をとどろかせた。以来、合計12編の武俠小説を執筆、個性的な登場人物や山あり谷ありのストーリーは全世界の華人に愛読されている。金庸の武俠小説は、もともと新聞や雑誌に連載されていたものである。金庸は連載終了後、まる10年をかけて作品を手直しし、単行本として出版した。それが現在に至るまで中華社会でロングセラーを記録している。

武俠小説は中国の時代小説であるが、日本の時代小説とは読者層が異なる。中国の武俠小説はおおむね青少年の読み物である。中国の若者（特に男子）は初恋や武芸の修行などのあらずじを盛り込んだ金庸の小説に大抵ハマるようである。その中で、金庸は老若男女に愛され、知識人のファンも多い珍しい存在である。

金庸の小説は何度もリメイクして、テレビドラマ化されている。主演俳優が誰か言わないと話が通じないほどである。『天龍八部』もこれまでにいくつもリメイクされてきた人気ドラマだが、張紀中がプロデュースした最新作は中国で最高視聴率を記録した。『天龍八部』の総監督である周曉文は主人公の喬峰について、「自分は誰なのか」、「どうやって復讐するのか」、そして自分の身分がはっきりした後は「世の中の平和」にのみ興味があったと言う。平和のために最後は自分を犠牲にした『天龍八部』の主人公喬峰のような人物こそが、彼を演じた胡軍が言うように、天下第一の大英雄であり、金庸作品中の代表的な人物である。

かげやま たつや (助教授・中国文学)

